



新橋小学校

# 学校だより

令和5年11月30日

令和5年度 第8号

## 「登校」という冒険

校長 西尾 琢郎

季節が、慌ただしく行ったり来たりしながら、それでも前へと進んでいることを感じる11月となりました。さる10月の運動会の欠席など、私自身も身体のあちこちが不調を来し、子どもたちをはじめ多くの皆さんに大変ご心配をお掛けしましたこと、心よりお詫び申し上げます。残念ながら、未だ快癒には至っていませんが、体調管理に努めながら務めを果たしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、久しぶりの巻頭言ですが、今回は「登校」について書いてみたいと思います。丘の上に位置する新橋小学校では、毎朝、子どもたちが坂を登って登校してきます。広い学区の中には、学校までかなりの時間を要する子もいますが、毎朝、元気に挨拶を交わしてくれる姿を見る度、本当にうれしい気持ちになるのです。

ところで登校は、なぜ「登る」と表現されるのでしょうか。山やその頂上に登ることを「登山」「登頂」とは言いますが、それらが文字通り「登る」行為自体を示しているのに対して、登校の場合、本校のように高台にある学校でなくとも同じように表現されることはご承知の通りです。

似た表現として思い浮かぶものには「登城」や「登庁」などがあります。これらに共通するのは、物理的に高いところへ登るというよりも、主君の城へ行くことや、官庁などの役所へ行くことなど、身分や制度などの公的な仕組みによって権威付けられた場所へ行く、というニュアンスがあったもののように感じられます。

ひるがえって学校について考えると、江戸時代の民間教育が寺子屋のような私塾を土台としていたのに対して、今からおよそ150年前の学制発布によって、まさに公的権威のもと、国家の発展に寄与する人材育成のために設けられたのが現在の学校の原型です。そこへと通うことを「登校」と呼んだ理由も、こう考えるとよく分かる気がします。

こうした由来はさておき、現在の子どもたちにとっても、朝起きて支度をし、学校に行くということは、実は一大事業なのではないかと思います。子どもたちの毎日は、私たち大人が想像する以上に、さまざまな出来事に満ちています。前日の友だちとの口論、前夜に弟とゲームの取り合いでケンカをしたこと、「早く起きなさい!」とお母さんに言われてしぶ

しぶ起きたその朝の気分、そのすべてが大事件です。そうした諸々を全部小さな胸にしまい、意を決して玄関のドアを開け、一步を踏み出すのです。ときにそれは「登山」のような覚悟を要する冒険なのかもしれません。

本校では、広い学区からすべての子どもたちが安全に登校できるようにという保護者の皆さん、地域の皆さんの願いのもと、登校班が編成され、子どもたちが列を作って学校へとやって来ます。そこには地域ごと、子どもの数や学年のバランス、そしてもちろん子どもの個性など、毎年いろいろな違いがあると思います。それはそのまま、本当の意味でのご近所の子どもたち同士が関わり合って共に育っていく、大切な学びの場でもあります。

しかし、誤解を恐れずに申し上げますと、登校班というのはあくまでも大人の都合で作られた集団です。そこに属している子どもたちには、班長など、便宜的に役割が与えられることもあるでしょうが、それは義務でもなければ、本質的には何らの責任を伴うものでもないことを、私たちは改めて認識しておく必要があると思います。子どもたちのために私たちが作った枠組みが、子どもたち自身に責を負わせるというのは矛盾ではないかと思うからです。

過去にとある小学校で、登校班の児童の列に自動車が入り込むという悲惨な事故がありました。この際、低学年の児童が命を落としたことに関して、リーダーを務めていた上級生が強い自責の念から心的外傷を負ってしまったと報道されました。どうしてこの児童は、そこまで重い心の傷を負わねばならなかったのでしょうか。そこに大人が与えた「役割」の影響はなかったのでしょうか。

教室の中がそうであるように、登校班の子どもたちには、さまざまな個性があります。小さな集団ですから、その中に、必ずしも大人が期待するような役割を果たせる子がいない場合もあるでしょう。それは当たり前のことです。

どうか皆さん、登校という大きなイベントに日々挑み続けている子どもたちに、自分一人を支える以上の過大な役割を当然のように求めないでください。力の足りない子がいれば、支えてあげてください。登校班の営みの中で、自分だけでなく他の子のことを思いやったり、お世話したりすることのできる力が育てばもちろん素晴らしいことですが、それはいわばボーナスのようなものです。まずは日々の安全を。そして毎日、少しずつでも一人ひとりの子が成長していけるよう、皆さんのお力添えをお願いしたいと思います。